

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-06

〈書評と紹介〉 水地宗明・山口義久・堀江聡 編『新プラトン主義を学ぶ人のために』

MUNEO, Masatoshi / 棟尾, 正敏

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

57

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

2016-03-20

新プラトン主義への最良の案内

棟 尾 正 敏

プロティノスからダマスキオスまでの詳しい案内は日本語ではこの書が初めてであろう。更に、アウグスティヌスからヘーゲル以降現代までの影響史が語られており、本文に入りきれない重要なトピックは、章間に適宜挿入されるコラムで扱われている。

水地宗明氏による第1章は、プロティノス哲学の簡明な要約、新プラトン主義概念の整理、先駆者たちの概説を含む。プロティノスには生涯と著作について解説した章の他に3章が与えられ、それらのタイトルは順に、「一者」、「知性原理」、「魂、物体」と3つの原理に倣ったものになっている。この順に理解が難しくなるが、それは、我々の世界に近づくにつれ、考慮しなければならない条件が増えるから、プロティノス自身が整合性を持たせるために苦心

しているのも一因と思われる。前2章ではアリストテレスとの対比があり、また最初の章ではプロティノスの神との合一体験も語られる。イアンブリコスの著書『アバモンの答え』は、師ボルフェリオスからの質問状への返答である。これは当時の神事に関する大伽藍のような著作で、非物体的で感覚を持たない神々がいかにして祈りに耳を傾けることができるのかという問いに対する巧みな議論(p.167)もあれば、大天使の顕現時の驚嘆すべき記述(p.169)もあるが、その背後では常にプロティノスの世界を構成するロジックが働いているように思われる。プロクロスはプロティノスの存在構造を精緻化する。その際の重要概念がヘナデスである。実例をまじえた解説(pp.204-6)は分かりやすいが、何故複雑化する必要がある

かははっきりしない (p. 212)。

字数の関係で影響史はほぼ紹介できないが、本文の最後を飾るのは山口誠一氏の「ヘーゲルから現代へ」で、ヘーゲルが一者を忘我によってではなく思惟によってつかむことができると理解したのを現代を代表する新プラトン主義研究者のバイアヴァルデスも受継いだことが語られ、「バイアヴァルデスに特徴的なことは、思惟の自己関係としての知性を、ヘーゲルと同じように、弁証法として解釈していることである」(p. 374)と締め括られる。

以上、評者には古代に限っても知っていることより知らないことのほうが多く勉強になったし、プロティノスの作り上げた体系の強靱さと、ミレトス派からプラトンにいたるギリシア思想の富を巧みに取入れていることを再確認できた。